

## 新シリーズ： マングローブ生態系に学ぶ

### 第1回： マングローブと国際耕種

一般にマングローブを特定の植物の名称と思っている人は結構多いと思うが、正確には潮間帯(満潮時には水面下になり干潮時には地表が現れる様な場所)に生育する耐塩性の高い植物の総称であり、その種類は70-100種ほどあると言われている。世界的には東南アジア、アフリカ、大洋州、北アメリカ、中南米等に広く分布しており、我々に関わりの深いアラビア半島にも分布している。日本では西表島をはじめ、沖縄地方以南がマングローブの主な生育地帯である。

国際耕種とマングローブのつながりには浅からぬものがあり、1980年代初頭にアラブ首長国連邦で水産養殖の専門家によって行われていたマングローブ林造成試験に関わり合ったことが振り出しになっている。さらに、AAI周辺の研究者などと共にMAMAS (Marine Aquaculture and Mangrove Afforestation in Sabkha)を立ち上げ、乾燥地域に分布する塩性湿地での植林に向けた情報・知識の蓄積を図ってきた。このような中、2000年4月か



オマーン・スール地区のマングローブ植生

らオマーン国地方自治環境水資源省(MRME & WR)の要請により、「入り江とマングローブ林のリハビリ」という業務でJICA専門家がAAIより派遣されている。ここでは、カウンターパートへの技術指導(移植適地の選定、苗生産、移植、生育管理など)や保全及び管理に関わる政策助言などを行っている。一方、上記の個別専門家派遣と並行して、JICAは2002年6月からMRME & WRの要請に基づき、主要な入り江での自然・社会経済環境を考慮した植林・保全及び開発形態の類型化、各入り江の個別開発案の策定を目的としたマングローブ植林・保全・管理に係わるマスタープラン調査を開始し、国際耕種も共同企業体の一員としてこの開発調査に参画している。

マングローブ生態系は、環境配慮の観点からは、サンゴ礁や湿地と同じく脆弱生態系の一つと見なされている。さらに、マングローブ生態系はラムサール条約の対象となる湿地帯の中にも数多く分布しており、湿地同様、近年とみに生物多様性のゆりかごとして注目を集めるようになって来ている。また、自然におけるマングローブ林の機能(サイクロン等からの沿岸保全機能、水産資源涵養機能、景観保全機能等)が重要視・評価されるようになり、現在では保全や植生回復の重要な対象になっている。しかしその一方では、エビ養殖場等の建設や地域開発のために乱伐され、広大な面積のマングローブ林が現在も失われつつある。

このシリーズでは、国際耕種とマングローブとの長年の関わりや経験(特にオマーンやアラブ首長国連邦を中心とした湾岸及びその周辺地域)に基づいて、マングローブの持つ歴史的、社会・経済的意義、さらには今日の環境保全や地域開発の観点からマングローブ生態系とどのように関わりを持っていくかについてじっくり考えてみたい。



気根の発達とヒルギダマシの花 (オマーン・シナス地区)